



経営の散歩道

一二九回

川中経営所長 川中清司

経済学者の嘆き

「なぜこんな経済学に生涯を捨てたのかとの悔悟の念にかられています」

経済学を専攻し、国立大学の学長まで勤めた日先生からこんなお便りを頂いた。

奥様を亡くされた悲しみと、最近の日本経済の有様に悲嘆にくれたお姿が目につかぶようでおいたわしい。

先生とは数十年來、各地の産地診断など、多くの経済の実証分析を一緒にさせていたのだが、いつもやさしく、研究の態度は一貫してヒューマニズムにあふれていた。

「生涯を掛けた経済の研究ですが、辿った挙げ句のはては赤裸々な経済の正体との出会いでした」

「どこを探しても恒久的な原理原則は存在しません。たわいのない学問になってしまいました」

見え始めた変化

あと数百日で二二世紀を迎えるこのとき、長い平成不況にのたうつ日本。

経済だけでなく、この国の先行きそのものにさえ憂慮を抱く人も多い。

「わずかに変化の兆しが見え始めた」という、堺屋太一経企庁長官の発言が、一条の明かりとなって、前向き志向を求める声が広がってきたのも事実だ。九九年の前年、経済が底を打



ち、この時期に金融問題もほぼ見通しがつく。六〇兆円の金融再生スキームも芽をふくと期待をこめる。

これからが本格的な冬これに対して厳しい反論もある。

カンフル注射を打てば持ち直すが、カンフルの効果は切れば病状はさらに深刻化する。

巨額の緊急経済対策で今のところ小春日和を味わっているにすぎない。これからは、本格的な冬が訪れる。担保物件の損切りと時価の下

落がつづき、貸し渋りはあとを断たず、需要と供給のアンバランスは四〇兆円にも達して、消費回復も設備意欲も一向に期待できない。世界をリードしているアメリカ経済も不安定要素が多いと言う。

変革とスピード

このデフレ要素を乗り切るだけのパワーを、どこに求めるところなのか。

恒例の年頭の経済方針には、再生と変革とスピードを叫ぶのが多かった。

再生（伊藤忠）
再生元年（日本水産）

悲観と楽観のかなた

その1

変革の年（新日本製鉄）

起死回生の年（三菱）

企業体質の強化（日本航空）

事業変革のスピード（東芝）

スピードと決断がキーワード（東レ）

これらをやり遂げるためには、どのような経営戦略が必要なのだろうか。

不況こそチャンス
経済学者のシュンペーターは、「経済を進歩させるのは、技術革新が原動力」であり、不況期こそがそのチャンスと、次のよ

うに主張している。

不況時は、土地や生産設備や労働力のいずれも安く調達できる。新しく立ち上がる企業家にとつて、それらを新技術と組み合わせて、ビジネスを起す絶好のチャンスであり、それを支えるのはワイルド・スピリッツ（野望に燃えた創業心）だ。

不況の時こそ多くの技術革新が生まれ、その企業繁栄が経済全体を動かす。むしろ不効率な企業が整理され、新しい企業と入れ替わることで経済の伸展がある。

攻撃に転ずる

「守勢一辺倒でなく、時を見極めて攻めに転ずる」一戦略用語では、「攻撃転移」という。目先の数字ばかりおっかけていては展望は開けない。

と、オリンパス光学の山下敏郎会長は言う。陸軍航空士官学校から東大哲学科へ進んだ逸材の声だ。

毎年売上の一〇%以上を研究開発につぎ込み、内視鏡で世界の七割のシェアをしめるトップ企業をリードしている。

どんな不況の中でも、状況打開にむけて戦略を練り、どの様な場面で実行するかを狙って突き進む。そこに率先リーダーの実像が光る。

つづく